

# MAPS 人格投影法と顕在性不安検査 (MAS) の関連性 — 一個人空間 (Personal Space) からの分析 —

渋谷 昌三

MAPS と MAS の関連性を Personal Space の観点から検討した。MAPS で使われた画像の種類、画像数、画像相互間の距離と MAS 得点の高低との関係を分析した結果、次のことが示唆された。① MAPS 中の「教室」の場面において、MAS 得点の高い者は低い者より、よりたくさんの画像を用い、それらの画像をより接近させて使用することがわかった。このことから、不安得点の高い者はできるだけ大勢の人たちと一緒にいたがる傾向が見いだされた。②不安得点の高い群では、動物(犬とへび)画像と人物画像との間の距離が人物画像同士の場合より小さくなる傾向があった。不安得点の高い者にとっては動物画像が特別の意味をもっている、ということが示唆された。

キーワード：MAPS, MAS, Personal Space

## 1. はじめに

本研究では、MAPS 人格投影法 (Make A Picture Story 以下、MAPS と略称)<sup>1)</sup>と 顕在性不安検査 (Manifest Anxiety Scale 以下、MAS と略称)<sup>2)</sup>を使用した。

Schneidman, E. S. は、Murray, H. A. の“Explorations in Personality”を読み、「人物像を背景の絵から引き離し、被験者自身に人物像を背景にあわせて置く機会を与える」という発想を得て MAPS を考案したと言われている。主題統覚検査 (TAT) の従兄弟ともいえる MAPS は、他の投影法テストに比べて次のような利点があると考えられている。

- ①日常生活の中の実際の対人場面を反映しやすい。
- ②対人関係の特色を具体的、客観的な手がかりを通して把握することができる。
- ③背景にあわせて画像を配置するという動作が要求されるので、被験者のテストに対する関与度が高い。

なお、MAPS は次のような背景の図版と切り抜きの画像から構成されている。背景は22枚 (各21.5×27.7

cm)であり、未構成、あいまいな絵画3枚、準構成的なもの4枚、明瞭に構成化されたもの15枚である。画像は、各4.9~13.4cmの大きさであり、人物画像65個、動物画像2個(犬と蛇)から構成されている。

一方、MAS は、Taylor, J. A.が不安の程度を測定する目的でミネソタ多面人格目録 (MMPI) から50項目を選定して作成したものである。本研究では、この日本版を使用した。

ところで、渋谷(1982)<sup>3)</sup>は、MAPS 人格投影法の反応(画像数、画像の種類、画像間の距離の取り方等)と親和欲求の高低との間の様々な関連性を明らかにすることができた。また、渋谷(1987)<sup>4)</sup>は、MAPS を利用した投影法的な方法により対人距離の発達の意味を検討することができた。

本研究では、これらの研究をさらに展開するために、MAPS と不安傾向との関連性を検討することにした。不安傾向と MAPS 人格投影法に投影されたパーソナル・スペースとの関係を検討する根拠は次のようなものである。

第1の根拠は、Argyle, M.たち(1965)<sup>5)</sup>の親和葛藤理論によれば、相互の関係の均衡が親密さの方向に大きく傾くと、拒絶されることへの不安や内面をさらけ出すことへの不安が生じるという考え方に基づいてい

る。この理論からすると、人はこうした不安を回避し、親密さの均衡を保つためにパーソナル・スペースを大きくとったり、視線の接触を減らしたりすることになる。

第2の根拠は、Schacter, S. (1959)<sup>6)</sup>の実験で、不安を強く持った女子大生は不安低減と自己評価への動機から他の人の近くに居ることを望んだことにある。つまり、不安感情が高まるとパーソナル・スペースを小さくして、不安を回避しようとする行動がみられるのである。

不安とパーソナル・スペースとの間には上述のような関係が考えられる。上述の不安は状況要因によって生じた不安感情であるが、個人特性としての不安感情とパーソナル・スペースとの間にも類似の関係が存在しているものと考えられる。

## 2. 目的

具体的な研究目的は次の通りであった。

1) MAPS 人格投影法で使われた画像間の距離と不安傾向との関連性を検討する。

2) MAPS 人格投影法の反応のうち、反応時間、画像数および画像の種類と MAS との関連性を検討する。

## 3. 方法

まず第一に、被験者である男子大学生 (3年生, 92人) に顕在性不安検査 (MAS) と Y-G 性格検査を実施した。次に、MAS 得点の高い群と低い群の被験者について MAPS 人格投影法を実施した。

MAPS は4種の背景 (図1) を「居間」、「街路」、「教室」、「風景」の順に提示した。それぞれの背景を机上に垂直に立て、その前面に B4判大の白紙を置いた。画像は画像立てを使用し、背景の前の白紙の上に並べるように教示した。画像の位置はこの白紙上に直接記録した。画像は S (5個) を除く62個を使用した。

作話の内容は被験者の承諾を得てテープレコーダに録音した。反応時間 (背景を提示してから画像が並ぶ終るまでの時間) はストップウォッチで計測した。その他、背景ごとの使用画像数およびその種類、画像間の距離を記録した。

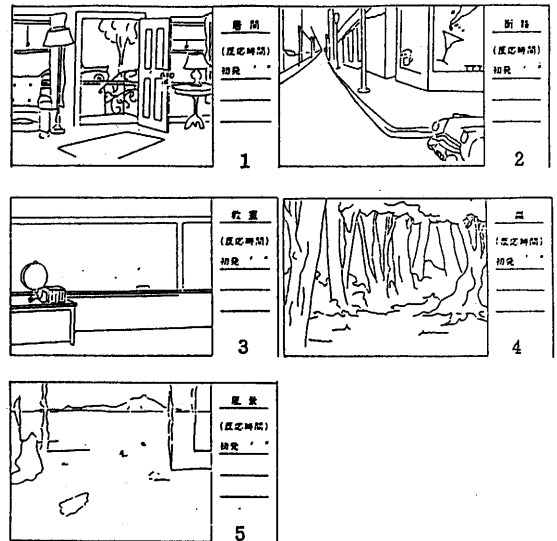


図1 本研究で使用した MAPS の背景 (縮図)

## 4. 結果と考察

1) 全被験者の MAS 得点の分布 (平均15.71 SD7.74) は、男子大学生および一般男子 (「顕在性不安検査」使用手引より)<sup>6)</sup> に準じるものだった。この結果をもとに、被験者のうち MAS 得点が22-38の者を高不安得点者群 (17人) とした。MAS 得点22以上は、上記使用手引書の一般男子の点数規準の I および II に相当している。一方、MAS 得点1-10の者を低不安得点者群 (15人) とした。MAS 得点10以下は一般男子の点数規準の IV および V に相当している。

2) 反応時間の平均は表1の通りであった。反応時間に関しては、背景間に有意差 ( $F_{(3,90)}=21.25, p<.01$ ) がみられたが、不安得点の高低との間には差がみられなかった。

表1 反応時間の平均 (秒) (SD)

	居間	街路	教室	風景
高得点群	131.6 (40.78)	190.9 (48.09)	164.5 (70.31)	245.1 (99.38)
低得点群	138.7 (54.65)	200.9 (64.48)	168.5 (92.62)	258.5 (109.41)

高不安得点者群と低不安得点者群についての分析結果を表2に示した。高不安得点者群では、「風景」の反応時間が他の背景よりも長いこと、「居間」は「街路」

より反応時間の短いことがわかった。また、低不安得点者群では、「風景」の反応時間が「街路」以外の背景よりも長いこと、「居間」は「街路」より反応時間の短いことがわかった。

表2 不安得点と画像数の平均(個) (SD)

	居間	街路	教室	風景
高得点群	2.5 (.62)	3.1 (1.57)	2.6 (1.41)	3.5 (1.91)
低得点群	3.7 (1.28)	4.7 (2.55)	3.6 (2.13)	4.6 (2.35)

以上の結果から、「風景」での作話に時間のかかることがわかり、4背景の中では最も物語が作りにくいことが示された。また、提示順序第1番目の「居間」は第2番目の「街路」より反応時間の短いことから、「居間」は比較的反応しやすく最初の背景として適しているものと思われる。

3) 画像数の平均は表3に示す通りである。画像数に関しては、不安得点の高低との間に有意差( $F_{(1,30)} = 7.39, P < .05$ )があった。しかし、背景間には差がみられなかった。この結果から、不安得点の低い群は高い群より多くの画像を使用していたことがわかった。

不安傾向の低い者が高い者に比べ、画像を多く使う傾向のあることから、不安傾向の低い者は実際の対人関係においてもより多くの人達と交渉をもっていることが示唆された。

表3 不安得点と各被験者の背景別画像間平均距離の平均(mm) (SD)

	居間	街路	教室	風景
高得点群	106.0 (30.48)	105.7 (23.53)	92.3 (44.99)	124.1 (31.62)
低得点群	107.5 (25.75)	101.9 (66.06)	70.2 (42.73)	100.4 (60.05)

4) 1つの背景における全ての組み合わせの画像間距離の平均(これを平均画像間距離と呼ぶことにする)を表4に示した。平均画像間距離に関しては、背景間に有意差( $F_{(3,90)} = 3.54, P < .05$ )がみられた。しかし、不安得点の高低との間には差がみられなかった。この結果から、「教室」は「風景」より画像間の距離が小さいことがわかった。

表4 反応時間の Studentized Range Statistic (Winer, B. J., 1962)<sup>7)</sup>

## ①高不安得点群

	居間	教室	街路	風景
居間			*	*
教室				*
街路				*

(\*  $P < .05$ )

## ②低不安得点群

	居間	教室	街路	風景
居間			*	*
教室				*
街路				

(\*  $P < .05$ )

「教室」と「風景」の画像間距離の違いは、「教室」の背景から受ける印象が『閉鎖的な空間』であるのに対して、「風景」の背景から受ける印象は『開放的な空間』であるといった印象の相違から生じているとも考えられる。

5) 各画像間の距離に関する分析を試みたところ、次のような結果が得られた。

①不安得点の低い群では同性同士の「子供」と「大人」の画像間に差( $t = 2.069, df = 40, P < .05$ )がみられた。すなわち、男性画像どうし(平均97.5mm)より女性画像同士(141.7mm)の方が大きかった。

②動物の画像に関しては、不安得点の低い群と高い群において、『「へび」と他の画像との間の距離』と『「犬」と他の画像との間の距離』との間に違いがみられた。不安得点の高い群では、『「犬」と他の画像との間の距離』(平均84.7mm)より『「へび」と他の画像との間の距離』(119.7mm)の方が大きかった( $t = 2.039, df = 26, P < .05$ )。

また、不安得点の低い群でも、『「犬」と他の画像との間の距離』(110.6mm)より『「へび」と他の画像との間の距離』(148.4mm)の方が大きかった( $t = 2.584, df = 53, P < .05$ )。同様に、『「犬」と「大人(男女)」の間の距離』(106.4mm)より『「へび」と「大人(男女)」との間の距離』(177.8mm)の方が大きかった( $t = 3.089, df = 33, P < .05$ )。

③その他、サンプル数は少ないが次のような傾向があった。「犬」と「子供(男女)」に関して、不安得点

の高い群 (平均32mm) は低い群 (119.5mm) より距離が小さかった ( $t = 2.509, df = 15, p < .05$ )。また、「へび」と「大人 (男女)」に関しても、不安得点の高い群 (120.2mm) は低い群 (177.8mm) より距離が小さかった ( $t = 2.171, df = 18, p < .05$ )。

以上の結果では、各画像間の距離と不安傾向との関係は明確にならなかったが、動物画像 (犬とへび) の使い方に何らかの問題が含まれていることが示唆された。

6) 各背景間の相関は表5の通りであった。それぞれの相関については次のような傾向がみられた。

①反応時間と画像数に関しては、全く同様な傾向がみられる。すなわち、「教室」は「街路」との間の相関は高いものの、「居間」や「風景」との間の相関は高くない。それに対し、その他の背景間の相関は高く、相互の関連性の高いことがわかる。このことは「教室」の背景が他の背景と異なった意味を持っていることを示している。

表5 背景間の相関

①反応時間

	居間	街路	教室	風景
居間		.414	.243	.456
街路			.400	.607
教室				.304

②画像数

	居間	街路	教室	風景
居間		.684	.289	.389
街路			.406	.428
教室				.204

③画像間距離

	居間	街路	教室	風景
居間		-.013	-.032	.133
街路			-.045	.429
教室				.213

参考までに、反応時間および画像数についてそれぞれ主成分分析したところ、いずれにおいても、第1主成分として「居間」「街路」「風景」、第2主成分として「教室」が見い出された。

4つの背景の中では「教室」の背景が被験者にとっ

てかなり特殊な意味を持っていたことが考えられる。「教室」での作話の内容を検討すると、大学での講義場面を取りあげたものが多かった。ところが、渋谷 (1982)<sup>1)</sup>が親和欲求とMAPSとの関連性を分析した際には、この背景で小学校の場面を取りあげたものが多かった。こうした2つの違いは、被験者集団の質的な相違を考慮する必要性を示唆している。

なお、「教室」と「街路」との間の相関は、親和欲求とMAPSとの研究の際にも高いことが認められており、共通した傾向であることがわかった。

②各被験者の背景ごとの平均画像間距離に関しては、「街路」と「風景」との間の相関が高かったが、その他の背景の間にはとくに高い相関はみられない。主成分分析の結果では、第1主成分として「街路」と「風景」が見い出されている。この2つの背景はいずれも戸外であるという共通点があるので関連性が高くなったものと思われる。しかし、その意味では同じく室内という共通点をもつ「居間」と「教室」の間での関連性は見い出されていない。

7) その他の相関から次のようなことが知られた。

①画像数と距離に関して、不安得点の高い群では、「教室」における画像数と距離との間に高い相関 ( $r = .679$ ) がみられた。不安得点の高い者は、「教室」の背景ではたくさん画像 (主に「子供」) をお互いに接近させて置いていることがわかった。

②反応時間と画像数に関して、不安得点の低い群では、反応時間と画像数との間に、「風景」を除いた他の背景において次のような高い相関がみられた。居間 ( $r = .526$ )、街路 ( $r = .507$ )、教室 ( $r = .725$ )。

このことから、不安得点の低い者は、「風景」以外の背景では画像を多く使用する者ほど反応時間が長いことがわかった。画像を多く使用することはそれだけ思考段階での構成に手間どることになる。すなわち、反応時間が長くなるということで、これは必然的な傾向のように思える。しかし、「風景」ではこうした相関の見られないことから、「風景」の特殊性が示唆されているものと思われる。

一方、不安得点の高い群ではいずれの背景においても反応時間と画像数との間に高い相関はみられなかった。不安得点の高い者では、『画像を多く使用したので反応時間が長くなる』といった常識的な反応が見られず、この点に意味があるように思われる。

## 5. 結 論

以上の結果および考察より、次のような結論を導いた。

1) 「教室」の背景は「風景」の背景の場合より画像間の距離が小さかった。このことから、閉じた空間(教室)と開いた空間(風景)ではパーソナル・スペースの使われ方に違いのあること、つまり、パーソナル・スペースはその人の置かれた空間の性質に左右されることが示唆されている。

2) 不安傾向と画像間の距離との間には明確な関連性を見い出せなかった。しかし、不安傾向の高い者は、「教室」の背景においてたくさんの画像を相互に接近して配置することがわかった。

「教室」の背景での反応が他の背景と異なっていたことや、この背景で大学での講義場面がしばしば登場したことからすると、被験者の大学生にとって、本研究でとりあげた4つの背景の中では「教室」の背景が最も不安に駆られる状況であったと考えられる。

このことから、不安やストレスのある状況では、不安傾向の高い者はできるだけ大勢の仲間と一緒にいること(すなわち、パーソナル・スペースを小さくする

こと)で不安を回避しようとすることが示唆された。言い換えると、パーソナル・スペースは不安回避の役割も持っていることが知られた。

## 文 献

- 1) Schneidman, E. S. : The Make-A-PictureStory (MAPS) Projective Personality Test. *Journal of Consulting Psychology*, 11, 315-325, 1947.
- 2) 顕在性不安検査(MAS)使用手引き。三京房, 京都。
- 3) 渋谷昌三: MAPS 人格投影法による親和欲求の検討。文部省科学研究費総合研究報告書, 88-89, 1982。
- 4) 渋谷昌三: 対人距離の発達的变化に関する投影法的研究。山梨医大紀要, 4: 52-61, 1987。
- 5) Argyle, M. & Dean, J.: Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304, 1965.
- 6) Schachter, S.: *The psychology of affiliation*. Stanford Univ. Press, 1959.
- 7) Winer, B. J.: *Statistical principles in experimental design*. McGraw-Hill, 1962.

## Abstract

### Relationship between MAPS and MAS —Analysis in Relation to Personal Space—

Shozo SHIBUYA

The relationship between MAPS and MAS was determined from the aspect of personal space. Detailed analysis of the relationship between MAPS and MAS (namely, the kind and number of the images used for MAPS and the mutual distance between the images versus the level of MAS scores) produced the following results. (1) In a schoolroom scene, subjects with higher MAS scores were found to use a larger number of images by drawing these images closer together than subjects with lower MAS scores. This seemed to suggest that subjects with high uneasiness scores tended to prefer to stay with as many people as possible. (2) In a group with high uneasiness scores, the distance between the image of animals (dog and snake) and that of human being tended to become narrower than the distance between the images only of human beings. This suggested that animal images have a special implication to subjects with high uneasiness scores.